北辺随筆＝富士谷御杖
燕居雑話＝日尾荆山
骨董集＝山東京伝

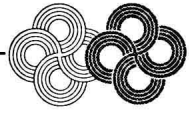
15

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第八巻
昭和二年十一月廿八日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会



日本随筆大成
〈第一期〉15

昭和五十一年一月五日　印刷
昭和五十一年一月二十日　発行

編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京二四四番

製　作＝株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、北辺随筆、燕居雑話、骨董集の三集を収める。

北辺随筆　四巻

富士谷御杖　著

本書は、京都国学の名家なる成章の跡を続ぎ、よく家名を堕さず研究を進めた著者の随筆である。従って内容は国語関係及び古典歌文等を中心とするものである。文化十三年三月の長歌を序の代りに題しているが、刊行は文政二年である。内容は百五十八条に及んでいる。然し時には、大雅堂と安永検校が近所に住み、検校がそこの絵はいと拙かるべしと云った逸話なども見えて居り、千字文を語る条には高芙蓉が羲之の千字文を双鉤した事なども見え、自分は芙蓉と親しかったが弱冠の頃なので見なかった等と記している。国語学関係では父成章の意見を祖述している所も多いが、一方歌人でもあった御杖は歌関係の古書より引用、自説を述べている。本書は巻頭に初編とあるが、第二編は刊行されなかった。

富士谷御杖　初名は成寿、成元、文化八年御杖と改めた。号北辺は父成章の号を襲いだものである。通称は専右衛門。父成章は安永八年十月二日に歿した。時に御杖十三歳であった。その後は伯父皆川淇園の薫陶を受けた。父の語学説を受け続いで『脚結抄』を重んじ、淇園の感化もあって、言語倒語説に基づく解釈学を樹立した。所謂言霊説である。此れは部分的な卓見は認められるが、全面的には従い難いと云うのが現在の通説のようである。其の他歌人としても当時の一流の位置に居り、其

の方面の著書もある。河喜多真彦著『近世三十六家集略伝』によると「代々柳川侯京邸の守(ルスキ)たり。御杖翁又弾箏の妙手なり。自ら雲井の曲と称する妙曲を制作して、其徒に授く」とある。其の多才思うべきである。文政六年歿した。山本東海編『平安名家墓所一覧』を見ると、

国学　富士谷御杖墓　名成元　文政六年十二月二日　五十六　　蓮台寺中　大慈院

とある。富士谷御杖の研究は、『富士谷御杖集』五巻(国民精神文化研究所編刊)、三宅清著『富士谷御杖』其の他多い。詳細は法政大学文学部史学研究室編の『日本人物文献目録』等を見られたい。

燕居雑話　六巻

日尾荊山(ひおけいざん)著

本書は和漢の学に通じた著者が、和漢の書を渉猟し、或いは人に答え、又は自らの備忘に書留めたものを、極く気楽な気持でまとめたものである。著者は亀田鵬斎門人として既に一家を成し、清水浜臣門人として和学に達し和歌をもよくした。専攻の著書は勿論別とし、巻頭の「雨夜の感慨」から、終末の「十牛図」に至るまで六巻にまとめられているが、計二百九十条に及んでいる。先ず「雨夜の感慨」で当時の学界の様、朝川善庵以下森薫烈等の諸大家の名を挙げて、茶話をする事から始まっている。世俗の事に関しては、長唄八朔梅というのにある「かひろと啼鹿」はかひよと鹿の啼くころはとあるかひよの音便なるべしと云い、江戸方言の「でんばう」や幡随院長兵衛の常套語(サダマリセリフ)「あはざ烏」の解をしたりしている。一方文政十一年火災により家産悉く烏有に帰し、儲蔵書籍さえ百笈あまり皆灰燼に帰すと歎いて、当時を追懐している。内容豊富で一々註記する事は出来ぬが、本書は誰でも何

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

か得る所のある随筆と云うべきであろう。本書には天保八年九月の自序があり、従来写本で伝えられていたが、無窮会蔵井上頼囶本によって『百家説林続編』に収められ、次いで本大成旧刊本にも編入、活字本として流布した。本書再刊に当っても、国会図書館本、静嘉堂文庫本の写本を参照した。静嘉堂文庫には、寺田望南の手に依って日尾家旧蔵本が多く現蔵されている。この日尾家本には「至誠堂蔵書印」の印記もある善本であるが、八巻本であるが一、二、三、の巻を欠いている残本であるのが残念である。松井博士旧蔵本の一本は流布本と全く同様の写本である。

日尾荆山　武州秩父郡日尾の城主の後なる医家林庵の子である。母は秋月氏。本姓魚澄氏、名は政寛、璞、瑜、字は得衆、葆光、徳光、通称多門、宗右衛門、号は恭斎、荆山、至誠堂、善司、直麿、呉竹舎主人等称した。専門は折衷派の儒家で亀田鵬斎の高弟、国学も清水浜臣門下の俊秀であった。寛政三年六月十五日に生れたが、三歳にして既に父母を失った。荆山に就いては森銑三氏が「酒田訪書録」に、池田玄斎著『弘采録』の記事を紹介して居られるのが一番其の人柄が現われると思うのでやや長文ながら左に抄記した。

荆山は辺幅を脩めず、畛畦をなさず。真率の人にて、いかにも才気はすぐれたる事とおもはる。此方の御やしき（庄内藩）の女中は大抵歌の添削を乞ふといへり。これは於鸞様に荆山御手許の御手本を上る故に、女中も心あるものは哥などの添削をもとめけるまゝ、神田橋の邸に限つては辞し難く、口腹のため鶏となり候とて笑ひながら申けるとぞ。いかにも浪人の身分は、巳年（天保四年）凶年の折からなど、大勢の家族を養ふには、儒業ばかりにては糊口もなし難かるべし。尤の事也と玄水（荆山門人長谷川氏、荘内の人）なども いへり。元来荆山は和流の手跡を三十年までは指南せるとぞ。いかさま短尺など書たるを見れば、尊円派と見ゆるものなり。なだら

かに美事なる書風なり。

この『弘采録』にはなお荆山に就いて興味深い逸話があるが、余り長くなるから割愛する。但しこの「燕居雑話」に当時の大家として名を挙げている佐藤一斎を其の著『訓点復古』に、聖堂にさしさわりありとして擬唐人の変名にて排撃し、平田篤胤が、

花鳥をわれもあはれと見てはあれどあはれとうとふいとなかりけり

と人を介して云いよこしたのに対して、歌にて、

うたふひまなくばうとふな花鳥の色音がそれでへりも致さず

と反歌している。而して篤胤が、世の学者が六国史より源氏物語などを読むのを歎いている事について、

唐まねびやまとこと葉は梓弓おして勝手にまかすべら也

これももらって篤胤も苦笑して、返事もなかったが、「もし返答あらば急度折檻をいたす心なり」と云っている。「其の客気いまだ失はず、自らも嘆かしくおもふなり」とも云っている。必ずしも世の大名に追随せぬこと右のようである。

荆山は初め神田白金町に住み、心学を学んだが、後儒家として大成し、安政六年八月十二日江戸湯島の僑居に歿した。享年七十一、谷中本通寺に葬られた。文貞先生と私諡された。

荆山の研究は、前記「酒田訪書録」（森銑三著作集第十二巻）の外に、日尾荆山の「衣幘碑」（新修荒川区史上巻）、塩谷啓山氏稿「荆山先生衣幘蔵碑と画像に就いて」（埼玉史談十二ノ六）、名村泰一氏稿「谷中日尾荆山の墓」（探墓往来二〇）、藤浪和子氏著『東京掃苔録』等がある。なお荆山のみに止まらず、日尾邦子等日尾家の研究には一応静嘉堂文庫蔵の日尾家旧蔵本を一覧願い度い。

骨董集　三巻（四冊）

岩瀬醒（山東京伝）著

本書は「近世奇跡考」に次ぐ、著者の第二近世風俗考証随筆である。本書には上篇としてあり、中篇・下篇をも続けて刊行する予定であったが、上篇の上中二巻が先ず出来て、下巻一冊が刊行され、遂に中篇、下篇は上梓に至らなかった。文化十年の冬に成った。南畝の序と下巻に同十二年の自序とが附してある。内容は主として江戸時代の風俗、服飾、器具、言辞、食物等に関するもので、古図、古書を引用して其の沿革を図示している。画工は喜多武清、歌川豊広、岩瀬京山等である。幕末の頃、江戸の学界に考証学が勃興し、其の中心になった人物が高田与清である。依って「擁書楼日記」を見ると、文化十二年一月八日の条に、

磐瀬醒は、世称は伝蔵、京橋銀座一丁目に家居して、京屋とも山東老店ともいふ煙草入をうるをもてなりはひとす。戯作雑著を好で、一の名を山東京伝といへり。

書記の塩梅で此れが擁書楼を京伝が訪ねた初めではあるまいか。八月十日に至ると、

了阿法師、磐瀬醒、同百樹などきたりし。随筆目録を編輯す。磐瀬兄弟は安斎随筆をよみ云々。

とある。十六日には、

磐瀬醒がもとより、さいつごろかしたりし空穂と源氏の類語をかへせり。

而して十六日には、

大田覃、北慎言、平由豆流、磐瀬醒、同百樹などきたれり。了阿ともろともに打つれて、鳥海恭が家にゆきぬ。京伝ことし五十五、

とある。鳥海恭は松亭、市川寛斎の門人で、蘭学者としても知られて居り、博学の士であった。文化

十二年同十三年頃には擁書楼に出入の多かった学者である。秋田矢島町の人である。

八月廿四日、未時ばかり山東京伝きたれり。骨董集中の挑灯の考に、朝野群載四の巻の挑灯柱のもれたる由かたりしかば、よろこびきゝおどろきて、いへらく、あやふきわざしつるかな。これ引もらして刊行したらんには、世人のいみじきものわらへとなりなんを、いみじくもさとしきこえ給ひしよ。さいつ頃示されし宝物集巻の三のうはなり打の事と、此の二つは、またなきたまもの也とて、こをどりしてよろこばしかりき……。

十一月十日、了阿法師、磐瀬京伝百樹など来つどひて、例の随筆目録を編輯す。

十二月十一日、……骨董集の新版二冊をおこせたり。

而して、文化十三年九月七日の条に、

今朝、山東京伝身まかりぬと、岸本由豆流がもとよりいひおこせたり。

私の心覚にこのようにある。此れで見ると京伝も、当時の考証家の仲間に居て互に自他を利していたようである。

山東京伝については本大成新刊本第二期第六巻の「近世奇跡考」の解題の項に略記したから、同書を見られたい。

目次

北辺随筆……一
燕居雑話……一五一
骨董集……三七

（解題　丸山季夫）

北邊隨筆

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

朝志保乃。本里江由。与世来流木積波毛。月爾日耳異邇。安里曾浪。以夜志九斯久宇
呉奈比都良九。横山乃如菟豆母利氐。取曾祁牟爾。樴貫阿倍受。焼宇氐牟耳。火鑽多
倍儒那毛安留。乏志伎毳。左夫斯貴鴨。綿津見乃宇豆能美手爾所纏珠。以蘇我九里。
可賀与比欲里世婆。未通女等賀。伊奈陀支耳毛伎勢。宇末臂苫能。宇麻良邇奴玖羅牟。
行相裳将見乎。伊勢海。阿胡禰乃浦。可毛度九。澳津島廻爾。洲爾居類舟能。沙文良
敝杼。以々豆々許々毛々。千江乃浦爾斯安礼婆。白珠乃。五百箇廼都度比。青玉能。
瑞枝乃璁笓珠守等我。家止古路告礼。以豆九麻芸氐可。以加奈留利目黥婆。手能末賀
比。足乃蹟那九。水底比可屢。美豆乃真珠波将拾毛乃叙登。真許登止不賀泥。安伎羅
牟流我年。

文化十三年丙子三月　　御杖

目次

巻之一

志貴島の道　一一
神書　一四
訓読　一四
仁徳帝御製　一五
御国言　一五
浅黄桜　一六
良馬　一六
脚結のをもじ　一六
くだかけ　はし鷹　一七
経緯　一八
子もちひじり　一九
ねばといふ脚結　二〇
梧桐　二一
若なすび　若瓜　二一
風のはふり　二二
ひさご花　二三
世をしりそめの神　二六
歇後　二九
有注の歌　二九
蚊子侍従　三〇
常夏　三〇
一絃琴　三一
伊勢物語　三一
阿々志夜　胡志夜　三四
しゞま　三五
おぼろげ　三五
几帳尺　三六
御の字の訓　三六
猿楽　三七
古物語　三七

栗飯　三六
さいはらひ　三八
木津川　三九
崇徳帝讃州遷座　四〇

小侍従　四〇
しのぶずり　四一
あとうがたり　しりうごと　四一
読書の心得　四三

巻之二

歌の巧拙　四三
草の汁　四四
畳の縁　四四
めづらしき事　四四
鶏の雄　四五
嗜酒　四五
好奇　四六
狐人の子をうむ　四七
夜光之璧　四八
雁の子　四八
筝の音　四九
探題　四九
大祓祝詞　五〇

蘆手　五一
雨衣　五七
養禽獣　五七
冠辞　五九
加賀智　六〇
よみづめの一格　六一
詞の時代　六一
道風書朝綱才　六三
山田之曾富騰　六四
古言簡約　六五
文の詞　六五
贔負　六五
放免　附揚名介　六六

訓と字の先後　六九
物語ぶみの詞　七〇
ものゝ上手　七一
おぼつかな　七二
子持烏　七三
真理　七三
泊瀬寺　七三
称誉　七四
夜もすがら　七五
猿滑　七六
葉守神　七七
心葉　七七
雲のかへし　七九
一升瓶　七九
君の淵　八〇
鶴脛　八〇
詞の緩急　八一
助字のたぐひ　八一
詞の延約　八二
散禁　八三
纏頭　八三

巻之三

手もすま　八六
夢現　八六
重点　八七
学問　八七
散木　八七
あしぎぬ　八八
紫式部見解　八九
歌の得失　八九
美許登　九〇
七夕　九一
ゆづ　九一
柚の漬様　九二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook